

研修期間 4週～

泌尿器科の概要

泌尿器科では主に腎・膀胱などの尿路と精巣・前立腺などの男子生殖器の諸疾患を扱います。我が国では高齢化社会を迎え、排尿にかかわる医療を行っている泌尿器科の重要性はますます高まっており、患者数も年々増加する傾向にあります。また、癌や良性疾患も含め、すべての泌尿器科疾患の診断と治療までを一貫して行うため、その抱える領域・範囲は多岐にわたります。また、尿路という管腔臓器を扱っているため、古くから内視鏡手術が導入されています。最近では、当たり前となっている内視鏡ですが、膀胱鏡が内視鏡の起源といわれています。腎癌、尿管癌、前立腺癌等の手術は、鏡視下に行われることが多くなっています。そういった低侵襲な手術の他にも、進行した腎癌の腎摘出術等のように長時間の開腹手術も経験することができます。また、2012年4月には、前立腺癌の手術にロボット手術が保険適応となり、また、2016年には腎癌の手術も保険適応となりました。当院では県内2番目に da Vinci を導入し、ロボット支援手術を積極的に行っており、特に前立腺全摘については2024年2月初旬の時点で総数900例を超え1000例を目指すところまでできています。また、一度途切れていた腎部分切除術も手術体制が整ったため2021年8月より再開しており、新たに保険適応になった腎摘除術や腎盂形成術などのロボット支援の腎関連手術も適応を選んで行っています。以上のように、当院泌尿器科では非常に幅広い、豊富な経験が可能と思われ、泌尿器科専門医として、知識、技術、態度の向上のために努力を惜しまない熱い志を持った医師を募集しています。

I. 対象となる疾患・病態

泌尿器科疾患全般

- ① 尿路性器悪性腫瘍・・・手術（開放手術、内視鏡手術、ロボット手術）、抗癌化学療法、放射線治療、緩和医療
- ② 尿路結石症・・・薬物療法、外科的治療、疼痛管理、緊急処置
- ③ 尿路感染症・・・抗菌化学療法、保存的治療、外科的治療、緊急処置
- ④ 排尿障害（主に前立腺疾患）・・・薬物療法、外科的治療、緊急処置等々

II. 研修到達目標

・一般目標 (GIO ;General Instruction Objective) ①

- ① 頻度の高いすべての泌尿器科疾患の診断と治療に習熟する。
- ② 尿路画像診断法のすべてを理解し、活用できる。
- ③ 泌尿器科疾患の手術手技および麻酔手技の習得
- ④ 学会発表などの学会活動を行う。
- ⑤ 日本泌尿器科学会の専門医取得を目指す。

・行動目標 (SBOs ;Structural Behavior Objectives) ①

- ① 膀胱鏡検査、尿道カテーテルトラブルへの対応、尿管カテーテル操作が単独でできる。
- ② 泌尿生殖器癌の診断および正しい治療選択ができる。
- ③ 難易度の低い開放小手術の執刀ができる。
- ④ 腰椎麻酔、閉鎖神経ブロックができる。
- ⑤ 難易度の高い開放手術および腹腔鏡手術、ロボット支援手術の第一助手ができる。
- ⑥ 尿路内視鏡手術の執刀ができる。

⑦外来および入院診療において主治医として患者・家族と十分な信頼関係を構築できる。

Ⅲ. 方略(研修場所：病棟、手術室および泌尿器科外来)

前半は入院診療では専攻医とペアで患者を受け持ち、指導医からの助言をもとに、一般的な泌尿器科疾患について、的確な診断・治療法が選択できることを目指し、外来診療では主に検査の介助を行います。後半は単独で主治医となり、指導医のもとで、より高度な疾患の治療ができることを目指します。手術に関しては、前半から積極的に助手として参加し、後半にはできるだけ多くの手術の術者となっていただきます。

Ⅳ. 評価

研修終了時に、研修責任者が、一般目標および行動目標の各項目につき評価判定を行う。

Ⅴ. 研修医への提言

近年、外科、内科とも消化器、循環器、呼吸器等と専門領域に細分化されている中で、泌尿器科が扱う守備範囲は、非常に多岐にわたっています。要するに、泌尿器科を受診した患者さんの、診断から治療までを一手に引き受ける必要があります。これには、大変な労力を要すると思われませんが、一人の患者さん、またその家族と向き合い、各種検査から診断を導き、さらには治療法の選択、実施へと医療を遂行していくことは、医療人として大変やりがいのあることと思います。

また現時点では、泌尿器科が選択肢に上がっていない研修医の方でも、今後の日常診療において頻繁に遭遇する尿路結石や血尿、尿道カテーテルトラブル等の泌尿器科的救急疾患に対し、緊急的な治療、処置を会得することは、医師としての将来的な対応能力の幅を広げることが可能となり、必ず将来役立つものと思います。